

### <書評と紹介>

---

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

45

(開始ページ / Start Page)

127

(終了ページ / End Page)

131

(発行年 / Year)

1993-03-24

## 〈書評と紹介〉

佐藤宏之著

### 『日本旧石器文化の構造と進化』

金山 喜昭

近年、わが国の研究者の手により、日本と欧米の先史学研究における学問的潮流を紹介しながら、それらを反省し新たな視点から研究を開拓してゆこうとする動きが目立つようになってきた。

渡辺仁 一九八五 『ヒトはなぜ立ち上がったか(生態学的仮説と展望)』東京大学出版会、安齋正人 一九九〇 『無文字社会の考古学』・六興出版、渡辺仁 一九九〇 『縄文式階層化社会』・六興出版などに続き、本書もその一連の成果の一つに位置づけることができる。

こうした背景には、一九七〇年代後半から本格的に全国で行われた大規模な発掘調査によって集められた膨大な資料群の取扱ひ方に問題がある。地中に埋まった遺物を発掘する事によって研究資料を増加させてゆく考古学のような学問は、資料群の全体的な状況に応じて、分析法・分析結果・解釈などの変更はやむをえない。学問は、歴史的に定型化した姿を表すものではなく、時代の要求に応じて不断の見直しが行われなければならない。学問に終りはないのである。その辺の事情を、著者は次のように述べている。

日本の旧石器考古学の方法は、それまで、遺跡で出土した石

書評と紹介

器の形態や製作技術上の特徴を分析していくつかの類型に分け、各類型を直接人間集団を指示する単位とみなして、その時間的・空間的配置を検討し、こうした様相を地域間の伝播と集団固有の系統を使って説明すると言うものであった。従って、地域を単位とした石器群の類型的な類似や特定の石器製作技術は、集団や地域社会の示準と考えられ、隣接した地域に似通った技術的要素が存在する場合、必然的に人間の集団移動の結果として説明されることとなる。こうした方法による解釈は、調査事例の比較的少なかった七〇年代前半以前には一定の有効性を持っていたが、それ以降の調査事例の増大に伴ない、資料と解釈の間に著しい矛盾を招いた。

つまり、本書は、従来のような単純な伝播系統論によるパラダイムを崩して、人類学・民族学・社会学・生態学などの諸科学とシステム論・構造論・進化論などの諸概念を考古学の方法論に適應する形に再構築し、多様で膨大な考古学データに應用して新たなパラダイムを形成することを目的とするものである。本書は大きく分けて次のような構成からなっている。

#### I、旧石器文化研究の歴史と方法

- 一、日本旧石器時代研究の研究史とパラダイム・ソフト
- 二、伝播系統論から地域進化適応論へ

- 三、先史考古学における新しい石器研究のための操作概念

#### II、前・中期旧石器時代

- 一、時代設定と遺跡

- 二、後期旧石器時代への移行

## 三、へら形石器の機能論的研究

## Ⅲ、後期旧石器時代前半期

## 一、研究の視点と展望

## 二、初期二極構造（その機能論的アプローチ）

## 三、二極構造論の提唱（台形様石器の登場）

## 四、前半期の日本列島の様相と遺跡の年代編成

## Ⅳ、後期旧石器時代後半期

## 一、前半期から後半期へ（等質性から地域性へ）

## 二、地域性の成立（中部高地「尖頭器文化」の再検討）

## 三、後半期研究の課題

## 四、後期旧石器時代の変革と縄紋時代への移行（定住型狩猟採集戦略の開発と生態適応スペクトラムの変化）

Ⅰは、まず今まで日本旧石器考古学が停滞してきた原因を研究史を辿ることによって明らかにしている。ここでは研究史を三段階に区分しているが、なかでも第二段階における戸沢充則の研究評価は注目される。著者は、戸沢の研究法を、①遺跡内の遺物の分布を個体別資料の同定とその分布及び接合資料の分布に基づき詳細に分析して、人間行動を立体的に復元した遺跡内構造論。

②分析の単位となる石器群の理論的抽出と概念規定を行った石器文化論。③石器文化論に基づき、日本列島の石器群の地域的体系をはじめて論じた石器文化構造論の三者に大別している。そして、日本旧石器考古学のパラダイム形成はここに原因があることを指摘する。そして、その停滞から脱するために民族学や人類学の方法論である生態学的思考法（生態系概念、適応戦略説など）

と進化論的思考法（新社会進化論、技術進化、一般進化／特殊進化など）から検討する必要性を説き、従来の伝播系統論以上に地域的な進化・適応論の立場を主張している。また、ここでは新たな石器研究の用語や概念として「相同／相似」「互換性」「親和性」「先適応」なども提案している。

Ⅱ～Ⅳは、Ⅰで述べられた方法論的な手続きに基づいて前期旧石器時代から後期旧石器時代終末までの歴史的評価について分析検討している。

Ⅱでは、日本列島における前期旧石器時代の資料は極めて少ないながらも、その特質は草原的環境適応型のアシュール系ハンドアックス石器群の北方に広がる森林的環境適応型の小型剥片石器群に共通する様相とみている。中期旧石器時代になると東アジア的剥片石器群の影響を強く受けながら、日本列島に在地的な独自の文化要素を次第に発展させ、次の後期旧石器時代へ自律的に連続するものとして考えている。中期旧石器時代から後期旧石器時代を架構する示準的石器として、へら形石器を重要な器種に位置付け、分析が行われている。

Ⅲは、後期旧石器時代になると、日本列島はナイフ形石器と石刃・縦長剥片剥離技術によって代表される独自文化が形成される一方、中期旧石器時代以来連続する求心的な剥片剥離技術による台形様石器と共に、二極構造が成立することが述べられている。

つまり著者は、二極構造によって当時の社会は複数の技術システムを同時に保有しており、適応の各場において、選択的・互換的に発現していたように理解する。これは、それまでナイフ形石器

群以外にも横長・幅広剥片剥離技術をもつ石器群が存在することについて、別系統の集団あるいは社会によるものだという従来の伝播論的解釈に一石を投じるものである。更に、後期旧石器時代前半期には、複数の多様な生態系利用のためのシステム化した技術系をもっているが、全国的な石器群構造の等質性などからみて、地域社会化は未達成の段階だとしており、前半期と後半期の境界はⅥ層期に相当することも述べている。

Ⅳは、Ⅳ層期を等質的社会・集団構造から地域性が分節化してゆく移行期と位置付け、その後特徴的に見られる石刃・縦長剥片剥離技術の表現形態が各地域ごとに多様であり、新しい角錐状石器や尖頭器など新たな器種が登場する。これを著者は、地域的及び生態的な適応が豊かになった結果と判断している。また、石材の原産地を本格的に開発するようになったことも地域性確立の重要な要因として扱っている。それは、地域の生態系への高度の適応特殊化を各地域の集団が進化させた結果、地域性の成立・地域集団の分節化・社会構造の複雑化・同盟関係の構築・準部族的な社会の出現などの重要な先史社会上的変化が現われたとしている。また、このことは地域的な石材受給システムを出現させ、瀬戸内型と関東型のような仮説を提示している。

さて、本書の内容は、細部においてはまだまだ多くの指摘や提示が行われているが、紙面の都合があるので、最後に若干の感想を述べて終りにしたい。

それは、本書の全体を通じて感じたことであるが、旧石器時代研究はまさに総合学の段階に達したということである。しかし、

そのわりに利用する情報や資料は限られている。考古資料は全国的に豊富に収集しているものの、動植物などの自然遺物データやその方面の成果についてあまり触れられていないのが気にかかるとは思われる。これはむしろ適当な情報が少ないために活用できなかったかもしれないが、著者が主張する新しいパラダイム作りにはやや問題が残ろう。つまり著者は、伝播系統論から脱却するための新たな方法論の一つに生態学を導入している訳であるが、生態系を形成する情報が現状ではまだ不足している。そのため、著者が石器群構造の変化を歴史的に評価する〔(後期旧石器時代)前半期を通じて、こうした生態適応戦略の特殊化・深化が進行した結果、後半期に至り、本格的な地域生態系開発のための地域的な開発戦略の単位化が成立するものと思われる〕といった見解は、十分理解することはできない。この辺については、今後の関連分野の成果を更に増加して、説を補強していかれることを望みたい。また、著者は中位理論として民族考古学が不可欠であることも指摘しているが、その辺の具体的な実践は今後に期待したいところである。

本書によって、わが国の先史時代研究における理論的・方法論的な再検討が行われ、更に活発な議論が行われることを期待したい。

〔一九九二年七月刊 三、八〇〇頁 三六二頁 柏書房〕

原 平三著

## 『幕末洋学史の研究』

安岡 昭男

本書には長短二一篇の論考を収録している。

1 蘭学発達史序説 2 近世末期における学制と洋学の発達に関する一考察 3 蕃書調所の創設 4 蕃書調所の科学及び技術部門に就いて 5 徳川幕府の英国留学生 6 我が国最初の露国留学生に就いて 7 露国留学生派遣の顛末 8 ゴンチャロフ著「フレガート・バルラダ」の邦訳について 9 露使「プーチャチン」の日本渡航路 10 伊豆戸田浦における露人の造船事業 11 徳川幕府の造船業 12 市川兼恭 13 幕末の独逸学と市川兼恭 14 市川盛三郎 15 高島五郎 16 高島五郎・追記 17 露和袖珍字彙と編者高須治輔氏の経歴に就いて 18 花心蝶思録の著者高須治助氏の生涯 19 東条英庵 20 松平忠固と赤松小三郎 21 市川文吉送別文執筆者略伝

著者原平三氏（一九〇八—一九四五）は長野県上田市に生れ、松本高等学校を経て、東京帝国大学文学部国史学科を昭和八年に卒業、文部省維新史料編纂事務局に入り、のち維新史料編纂官に昇進したが、昭和十九年六月召集入隊、翌二十年四月フィリピンで戦死された。この間三十篇近い大小の論考を『史学雑誌』『歴史地理』『歴史学研究』『伝記』その他各誌などに発表され、本書

に収録されていない「天誅組拳兵始末考」「征韓論と明治六年十月の政変」「シーボルト事件と和蘭通詞猪俣源三郎」などもある。

本書の内容を大別すれば、(1)蘭学(洋学)の発達、(2)洋学研究機関、(3)海外留学生、(4)造船事業、などとなる。いずれも着実な基礎的・実証的な論考で、その後研究が進んだ現在でも学問的価値を失わない。市川兼恭については、優に一冊の伝記書をなすほどの質量を擁する研究で、戦後一時出版の企画が中断したものである。発表以後に、例えばロシア留学生に関しては内藤遂著『遣魯伝習生始末』（一九四三 東洋堂）、近年、21送別文執筆者の黒田行次郎について平田守衛著「黒田麴麴」と「漂荒紀事」（一九九〇 京都大学学術出版会）なども出ているし、宮永孝氏（本学社会学部）による一連の海外使節・留学生に関する論者がある。その中で本書は後進研究者が必ず参照すべき基本書といえよう。戦後も存命ならば、幕末洋学史研究の第一人者として活躍されたことであろうと惜しまれてならない。

本書が共同研究論文集の『幕末の洋学』（中山茂編 一九八四 ミネルヴァ書房）、好個の概説書『洋学』（沼田次郎著 一九九一 吉川弘文館）について、また蘭学資料研究会の解消に代わる洋学史学会発足に続いて刊行されたことは、まことに意義深い。

本書が世に出るまでには故人の長女小見寿さんをはじめ、維新史料編纂事業を共にした小西四郎氏（元本学講師）の多大の尽力があり、本学関係者では児玉幸多氏（元兼任教授）が序文を寄せ、交遊が深かった人々として、斎藤忠・杉本勲・豊田武・渡辺保・桃裕行の諸氏、維新史料編纂事務局では藤井甚太郎・森谷秀

亮・遠山茂樹各氏、以上いずれも本学の教授または講師を経歴されてゐる。交友関係者で最高齢は文学部国史学科昭和三年卒業の大久保利謙氏（一九〇〇〜）で『幕末維新の洋学』を含む歴史著作集全八巻が（吉川弘文館）完結目前である。

本書の出版を地下の著者のもとより、『蘭学の発達』（岩波講座日本歴史 一九三四）の著者板澤武雄博士（一八九五〜一九六二 本学教授）も喜ばれているであろう。

なお別に編まれた『原平三追悼文集』（非売品）によって故人の人柄を偲ぶことができる。

〔一九九二年四月刊 九、八〇〇円 A5判 三七四頁 新人物往来社〕

【会員編著書抄】

星野 良作著	『広開土王碑研究の軌跡』	吉川弘文館	平成三
前川 明久著	『日本古代政治の展開』	法政大学出版局	平成三
石井 正敏共編	『アジアのなかの日本史』全六巻	東京大学出版会	平成四
齊藤 勉著	『中央本線四一九列車』	のんぶる舎	平成四
佐藤 宏之著	『日本旧石器文化の構造と進化』	柏書房	平成四
安岡 昭男編	『近現代史用語事典』	新人物往来社	平成四
村上 直共編	『日本史論文の書きかた』	吉川弘文館	平成四
村上 直編	『近世社会の支配と村落』	文献出版	平成四
	法政大学考古学研究室編		
	『会津田島寺前遺跡』	福島県田島町	平成四
村上 直編	『近世史用語事典』	新人物往来社	平成五